漢字学習は知能の発達を促す

しかし、文字は難しいから覚えられたいのではなくて、文字を覚えるべき時期に教えられないから覚えないのだと私は思います。そういう時期に覚えさせれば、文字を覚えることはたやすいことです。言葉を覚える能力のないものでも文字は覚えられるのですから。特にひどい脳障害児でない限り、子どもたちが言葉を覚えるのは、幼児期に絶えずそれを反復して耳にしているからなのです。やさしいから覚えるのではないのです。一方、漢字は誰も赤ちゃんに教えるなどということをしません。だから、漢字は覚えられないのです。しかし、又吉信一氏のように、まだ八か月にしかならない赤ちゃんでも漢字を教えてみると、普通なら言葉がまだ 30 か 40 くらいしかしゃべれない頃なのに、もう三百の漢字が識別できて読めるようになるのです。漢字の方が言葉よりもはるかに覚えやすい、ということは間違いなく言えると思います。

ただ、こういう事実をすぐさま学校教育に取り入れることは難しいと思います。しかし、私はこれから百年後の日本、いや世界では、文字はもう赤ちゃんのときから教えられるようになるだろうと思います。文字は、幼児期には実に能率よく覚えるものであり、また文字は言葉よりも思想をはっきりと表わすものでもあります。それに言葉と文字とを比較しますと、言葉は人によって発音が違ったりして不安定なぬのですが、文字はいつも一定で安定度が高いからです。

それからもう一つ。たとえば、「手」「受」「授」という字があります。これらの文字の発音は、現代の中国語音では三つとも [show] という発音なのです。元来、[shouw] という発音の言葉は、手そのものを表わす言葉だったのですが、手は受けとる道具でもあり、またものを授ける道具でもあって、だから、[shouw] という言葉が「受」をも意味し、また「授」をも意味するようになったのです。それでこれを文字として記録するときは、「手」と「受」と「授」と、区別して書くようになったのです。文字が作られるときは、必ずその言葉に対応して作られるのですけれども、発達していくと、その使い方、意味がいろいろに分かれていく

ようになるので、同じ言葉でも文字としては書き分けた方がよい、ということになるわけです。

これは日本語においてもまったく同じです。「ハナ」という言葉がありますが、これは元来「端」という漢字の意味の言葉です。つまり、突き出たところを意味する言葉です。私どもの顔の真中にある鼻も、突き出たところですから「ハナ」というわけです。花も草木の突端に咲くので「ハナ」と言うのだと思います。それから鼻から出る洟という字もあります。私どもは、「ハナ」という言葉を、現在四つの漢字で書き分けているわけです。いちいち「顔の中にあるハナ」とか「草のハナ」とか「ハナから出るハナ」とか言わないで済むわけです。そういうわけで、文字＝漢字が出現することによって、思想がより正確に、しかもわかりやすく表現できるようになったのです。ですから、そういう漢字を三歳ぐらいのときから学ばせますと、自然と頭の働きが良くなるようです。

実は、そういう漢字学習をするようになった幼稚園では、知能テストをしますと、以前に比べて IQ が 30 ぐらい違ってきた、という報告があります。川崎のある幼稚園では、漢字教育をするようになってから、IQ の平均が 130 ぐらいになったといいます。普通、130 などという知能指数は、クラスに何人もいるような数値ではありません。それから松本のある幼稚園も、園児は選抜しないで志願者は誰でも入れているそうですが、卒業時の知能テストでは、平均 160 になっているそうです。普通でしたら千人に一人もいないような高い数値です。ところがここの幼稚園の報告によりますと、ここ七、八年は平均が 160 を下らないということです。